

Lord of Knights

Z 秋山

冥王軍本拠地、キングキャッスルにほど近い街に二人の男女がたどり着いた。

「なあサラ、本当にこれで良かったんだろうか。」

「私だって本当はあんな無茶な作戦に乗りたかった訳じゃない。でも、クリスタルキャッスルを全て冥王軍に支配されてしまった今、時間が経てば経つほど状況が悪くなっていくだけだわ。」

「俺だってそれくらい分かっている。でも、もう仲間や家族が冥王軍の犠牲になる姿は見たくないんだ。だからこそ、今まで血の滲む思いで自分の力を鍛え上げて来たし、ヤツらの砦を潰す中で慣らし、調整してきたつもりだ。」

「あなたがどれだけ努力してきたかは皆知っているわ。皆でクリスタルキャッスルを各個撃破して行く、という案を主張したあなたを責めている訳じゃないの。でも、もう戦いは始まっている。もしかしたら、こうしてる間にも・・・」

その先を言いづらそうにするサラの言葉をアルフレッドが遮った。

「すまないサラ。俺だってレーヴェンの出した策が一番良いってことぐらい、本当は分かっているんだ・・・。どうあがいても、誰の犠牲も出さずにディグラストを倒すことはできない自分の無力さに腹が立っていただけさ。大丈夫、戦いが始まれば迷いなくやれるよ」

「そうね、どのみちもうやるしかないんだもの。やれるだけやってやるわ。あ、宿に着いたみたいよ！ここに来るまでも使い魔を消費してしまったし、万全の状態に回復させて明日に臨みましょう！」

「ああ。しつかり整えておくよ。」

やり取りを済ませた二人は迷いのない表情でそれぞれの部屋へと入っていった。

話は一ヶ月前に遡る。

世界中からの強者を募って出来た、まさに人々の最後の希望とも言える騎士団では団長のアルフレッドを始め、その仲間達全員がある結論に達していた。日に日に勢力を増す冥王軍に対し、強行策を取らねばいずれじわじわと追いつめられるだけだ、というものである。

議論となったのはその強行策の内容だった。明け方まで議論が交わされ、いくつもの策が出されては問題が見つかり却下されていった。唯一現実的な策として残っていたのが、アルフレッドの出した、騎士団の全勢力を以ってクリスタルキャッスルを各個撃破していく、というものだった。これで行くしかない。誰もがそう思ったその時、騎士団の軍師レーヴェンが言いにくそうに一つの策を話した。

レーヴェンの策には騎士団の誰もが驚きを隠せなかった。それは、8つのクリスタルキャッスルに対して同時に攻撃を仕掛け、それを陽動として、手薄になったキングキャッスルのデ

イグラストをアルフレッドが討つ、というものであった。

仲間想いのアルフレッドは仲間を危険な囿役にするこの策にひどく反発したが、サラを始めとした団員達は誰も反論しなかった。アルフレッドは幼少のころ冥王軍に村を焼かれ、両親を失っていた。そのせいもあり仲間の犠牲を極端に嫌う、優しすぎるとも言える性格だった。レーヴェンがそのことを知っていることは騎士団の誰もが知っていた。それでもなお、レーヴェンがそんな策を出さねばならぬほどに状況は切迫していたのだ。

結局、各個撃破では時間がかかり過ぎ、被害が余計に大きくなってしまおうという理由で、騎士団はレーヴェンの策を取ることとなった。一ヶ月後に冥王デイグラストの居城キングキャッスルに乗り込むこととなったのはアルフレッドとサポート役のサラで、その他全員は分散して二週間後から各キャッスルに陽動を仕掛けることになったのだった。

「いたた・・・流石にキングキャッスルに近づいて来ると、敵が固いな・・・。倒しきるまでに何撃もかかってしまう。何が騎士団最強だ、聞いて呆れるな。」

「大丈夫？」

サラがアルフレッドの傷口を慣れた手つきで手当てしていく。

「敵はひとまず去ったみたいだし、その河原で少し休みましょう。」

二人が河原に移動すると、川辺には岩に腰かけ微動だにせず川を眺める一人の少女の姿があった。

「何者だ!？」

こんなところに少女がいることに違和感を感じ、敵意をむき出しに剣を構えて問いかけたアルフレッドに対し、少女は特段の警戒もなくゆつくりと振り向き、問い返した。

「お前こそ何者だ?何故、冥王軍でないものがこの地にいる。」

「俺の名はアルフレッド、冥王デイグラストを討つためにこの地に来た!」

その言葉に一瞬表情を変えた様にも見えたが、すぐに元の無表情とも言える顔でつまらなそうに返した。

「つまらぬ冗談だ。冥王軍随一の火力を持つダークドラゴンのブレスを受けてたとて、数時間もあれば回復するデイグラストを人風情の力で倒すだと?まあ良い、私は確かに冥王軍の一員だが、お前に襲い掛かるつもりもない。とりあえず剣を下ろせ。」

自分の力不足を感じ始めた矢先の一言に食い掛ろうとしたアルフレッドを制止し、サラが少女に問いかけた。

「あなたの名前は?なぜデイグラストを倒しに来た私たちを止めないの?」

少女は少し考え、そして答えた。

「名はヨミ。止めない理由は簡単で、お前らが万に一つ、デイグラストを倒しても私は困らないからだ。」

「なぜ?」

すぐさま問いかけたサラにヨミはぼつり、ぼつりと答えた。

「私はデイグラストに異界より召喚された身でな。他の者共と違い、好き好んでデイグラス

トに従っている訳ではない。」

「それではなぜディグラストに従っているの？」

「元の世界に帰りたいからだ。私が元の世界に帰る方法はただ二つ。冥王軍がレムリア大陸を支配したらという約束に従いディグラストが召喚を解除するか、召喚者であるディグラストが死ぬか、だ。」

敵意はなく、目的も同じくできる相手に会えたことに喜んだサラがヨミに詰め寄る。

「それじゃあ私たちに協力してよ。一緒にディグラストを倒しましょう！」

しかし特段の反応も見せず、ヨミは淡々としたテンポで言葉を返す。

「先に言った通り、やつ回復力は人風情に倒しきれものではない。が、少し気にかかることがある。おい小僧、その剣の持ち主もここに来ているのか？」

サラに制止された後、黙って話を聞いていたアルフレッドは不意に話を振られた上、小僧扱いされ、戸惑いつつ答えた。

「これは親父の形見で、俺の剣だ。」

その言葉を聞き、少し寂し気にヨミが返す。

「そうか・・・奴は死んだ、か。親父、ということはお前は奴の血族だな？剣の柄にある印はもう使ったのか？」

「お前は親父を知っているのか・・・？剣の柄の印？何のことだ？」

「30年程前、少し暇つぶしに付き合ってもらってな。特異な潜在能力を持つお前の親父に僅かばかりの期待を込めて、能力を覚醒させる印を札代わりに彫ってやったのさ。頭をその印に当ててみる。」

訳も分からないまま、アルフレッドは訝しげな表情で印を頭に当てる。

「なんだ！？・・・これは！？」

体の違和感に驚くアルフレッドに構わず、ヨミが言葉を続ける。

「普通の人間というのは、潜在能力を覚醒させてもその力がせいぜい10倍にも満たない程度に強くなるだけだ。しかし、お前の血族は特殊だな。最初は弱い力しか出ないが、戦いが長引けば長引く程に力を増し、最終的には信じられない程の力となるはずだ。ディグラストの手下程度にやられたとなると、お前の親父も短い時間でやられたのである」

今も脳裏に焼き付いている両親の死に様を想い、アルフレッドは答えた。

「・・・その通りだ。焼けた家から俺と母さんを連れ出した親父は、母さんをかばって外で待ち伏せしていた奴らにやられたよ。」

「やはり望みは僅かであったか・・・。そうなりたくなければ、キングキャッスルに着いたら常に戦い続ける。集中を切らせば力が戻ってしまう。極限まで高めた力を叩き込み続ける。この川を上っていけばキングキャッスルへの近道だ。使うといい」

「あなたは一緒に行かないの？」

そう聞かれたヨミは何を言われているのか分からない様な表情で、さも当然というように返した。

「最初に言ったが、私は自分の世界に帰りたいだけだ。お前らがディグラストを倒せなかったら今まで通り、冥王軍がレムリア大陸を支配するのを待つだけさ。奴に約束を反故にされてはかなわんから、私が力を貸したことは言ってくれるなよ。」

「分かった。ありがとう。」

アルフレッドは頷きながら礼を言うと、立ち上がった。

「さあサラ、行こう。」

今もなお語り継がれる勇者アルフレッドと冥王ディグラストとの戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

後にレムリア大陸全土を冥王軍より解放した彼のことを人々はこう呼ぶ、

全てを覇せし者・Lord of Knightsと。

※当作品は「Lord of Knights」短編小説募集企画に応募いただき『優秀賞』を受賞した作品です。